

第8回

中国の分裂と多様化

監修・講師
 佐川英治

学習のねらい

2世紀末の黄巾の乱をきっかけとして、漢帝国は崩壊の道を歩みはじめ、魏・蜀・呉の『三国志』の時代に入る。西晋による再統一もつかの間、北方では五胡と呼ばれる諸民族の国が乱立し、洛陽や長安を奪われた西晋の皇族・貴族は、江南に逃れて建康（現在の南京）に都をおき、東晋を興す。5世紀には、北方では北魏が華北を統一し、南方では東晋が滅びて南朝が興り、中国が北と南に分かれて対立する南北朝時代に入った。この時代は分裂の時代ではあったが、漢の時代には辺境の地だった江南が発達して中国文化の中心地となったり、仏教が浸透して諸民族共存の文化が生まれたりした時代であった。

<三国時代>

黄巾の乱 魏 呉 蜀 曹操 孫権 劉備 江南

<仏教の伝来と広がり> 五胡十六国 北魏 石窟寺院 仏教の保護

<江南の貴族文化> 貴族文化 廬山 自然美 顧愷之『女史箴図』

■ ■ ■ 三国志の時代 ■ ■ ■

自然災害が頻発し、社会に動揺が広がるなか、「蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし」をスローガンに、道教の信徒たちによる**黄巾の乱**が起こると、後漢の皇帝の権威は急速に衰え、天下は群雄割拠の状態となった。諸葛亮から「天下三分の計」を示された**劉備**は、**孫権**と連合して**曹操**を赤壁の戦いで破り、**魏・蜀・呉**が並び立つ状勢を生み出した。曹操の死後、子の曹丕が漢の献帝から**禅譲**を受けて皇帝となると、劉備と孫権も相ついで皇帝に即位し、天下に複数の皇帝が並び立った。この背景には四川、**江南**といった長江流域の社会の発展があった。三国の対立は、一面では中国の分裂であったが、一面では長江の上流や下流に、新たな中国文化の中心地が生まれ、中華世界が拡大したということでもあった。

■ ■ ■ 仏教の伝来と広がり ■ ■ ■

西晋は一時的に中国を再統一するものの、内乱によって弱体化し、支配下にあった**華北**の諸民族が、次々と自立して国を建てていく**五胡十六国**の時代に入った。5世紀にはその中から鮮卑の**北魏**が抜け出して華北を統一した。インドで生まれた仏教は、後漢時代に中国に伝わったが、中国の社会に広く浸透するようになるのは、この五胡十六国北朝の時代である。混乱した社会に生きるこの時代の人々は、見知らぬ者同士の連帯をうながす仏教に、儒教にはない新たな共生社会の可能性を見いだした。北魏は都の近くの**石窟寺院**に歴代の皇帝をイメージした5体の大仏を作ることで、**仏教を保護**する姿勢を明確にした。こうして仏教文化は東アジアに広がっていくことになった。

■ ■ ■ 江南文化の発達 ■ ■ ■

黄巾の乱以後、江南には華北の混乱を避けて南下してきた多くの漢人が移り住むようになった。西晋の末になって、洛陽や長安が異民族の政権の手に落ちると、西晋の貴族たちも江南に逃れ、西晋の皇族をもり立てて、318年に三国の呉の都の地で東晋を興した。これ以後、589年に隋が中国を再統一するまでの間、建康（いまの南京）は、東晋南朝の都として栄え、新たな中国文化の中心地として、華やかな**貴族文化**を生み出した。この時代には、女性美や**自然美**が、詩や絵画の題材とされるようになった。自然に対する美意識は、のちの山水画を生み出した。

考えてみよう 調べてみよう

- 洛陽、西安、南京に都があった王朝を調べて、整理してみよう。
- ユーラシアにおける気候変動が、歴史にもたらした影響について調べてみよう。
- 漢字の楷書、行書、草書が、いつ、どのようにして始まったのか調べてみよう。